

入選

テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「私が考える『共に生きる社会』」

大阪府・四天王寺高等学校2年 橋本唯衣

中学生の時、職場体験で障害児の施設に行かせてもらった。それから、漠然とだが福祉に興味を持った。高校二年生の夏休み、友人は進路を絞り込み勉強に忙しそうだったが、はつきりとした進路が決まらずに悶々としていた私に、「一度デイサービスへ体験に行かせてもらったら」と母が言った。この母の言葉をきっかけに、私はボランティアとして老人介護のデイサービスに行かせてもらうことになった。

私が行かせてもらったデイサービスは、施設を大学と呼び、利用者の方を学生と位置づけ、本当の大学のように様々な授業を受け、単位を取得していくというシステムで、利用者の方の「生涯学びたい」という気持ちを支えていくことを理念に掲げていた。

私は、そこでたくさんさんの経験をさせてもらった。体験初日、なんとか自己紹介を終えてほっとしたのも束の間、その日の利用者の方全員に握手をしながら挨拶をするという課題が与えられた。なぜ、握手をするのか分からなかったし、祖父母以外のお年寄りと話す機会もほとんどなかったこともあり、自分から話しかけることができず、ほんの数人の方としか握手ができなかった。その日の終わりに、他のスタッフさんになぜ握手をするのか聞いてみた。すると、握手をすることに よって、体温や皮膚の状態から体調を知ることができただけでなく、言葉を交わし、肌に触れることでスタッフが利用者の方から元気を貰えると説明を受けた。私はとても驚いた。スキンシップが喜ばれるのかな、くらいに思っていたことが、利用者の方の為だけではなく、スタッフの為に必要だったのだ。私は、利用者の方に元気を与えるだけでなく、元気を貰えるということに感激した。私自身も言葉をかけてもらい、元気になることを感じる事ができた。

また、このデイサービスの様々な授業のほとんどは、地域のボラン

ティアの方が講師をつとめている。その中に混じって、一人だけ利用者兼講師として活躍している医師がいた。先生は八十二歳になった今も、毎週一回、健康講座として体の仕組みや病気を予防する生活習慣について講義する他、他の利用者さんの健康についての悩みなどを聞くということをや約十年間続けていた。毎回講義の内容を考え、しっかりと準備をすることは想像もつかないほど大変だと思う。自身も身体障害や持病を抱えながら継続されてきた先生の強い意志に感銘を受けた。さらにデイサービスのスタッフさんの相談に乗ることもあり、とても頼りにされていた。私はそんなスタッフさんと先生の関係を見てとても素敵だと思った。

共に生きる社会とは、助ける側、助けられる側がお互いにどちらにもなれることだと思う。介護する側としてお年寄りに接していても、なにかあった時に知恵を借りたり、介護される側だったとしても、自分ができる範囲で誰かの役に立とうと、一生懸命に取り組んだりすることで、お互いの生活がより良いものとなるのではないだろうか。

また、今回、デイサービスで利用者の方に、「ありがとう」と言っていただいたり、私と話すことを楽しみにしていただいたり、高校生でも助ける側としてできることがあるという実感を得ることができた。しかし、私たちのような世代は、介護などに触れる機会はほとんどない。若い世代と高齢者の世代がもっと活発に触れあえ、同じ社会の一員だと自覚して生活するようになることも、共に生きる社会を実現する為の一つだと思う。私は、この貴重な体験を活かし、これからも自分ができることを探していきたい。